

江戸



背景

那賀川は「阿波の八郎」と言われるほどの暴れ川で、かつて沿川では頻繁ひんぱんに洪水に見舞われました。阿南市羽ノ浦町には大きな広間を持つお寺があり、この広間の畳は洪水の氾濫を防止する道具として使われてきました。那賀川の水位が上昇すると、地域の人々が畳を持ち出し、堤防の上に畳を横に立て並べて、裏に土俵を積むなどして畳の堤防を築きました。

畳が庶民に普及し始めたのは江戸中期以降とされていますが、一般の農民の手の届くものではなかったようです。このため、地域の人が共同で負担してお寺の広間に畳を敷いたり、庄屋などが地域のために提供していました。

アクセス 観音寺

- 那賀川橋北詰より北東へ直線距離約 1 km
- 阿南市羽ノ浦町古庄宮ノ後78
- 緯度経度 北緯33度56分45秒, 東経134度37分48秒



阿南市羽ノ浦町古庄の那賀川沿いに、観音寺というお寺があります。普通、お寺の広間は板の間ですが、このお寺には広大な畳の間があります。普段は住職だんかが檀家の人々などに教えを説いたり、仏事の行事をしたりするのに使われる場所です。

じつは、この大広間の畳は、かつては水防のためにも重要な役割を果たしていました。大雨が降り、那賀川の水位が七分水（堤防高の七分目ぐらいの水位）になると、地域の人々がお寺の畳を堤防に運んで、洪水に備えたそうです。この地域には水防活動の用語として「百畳敷」の言葉があつたと言われています。また、付近の旧庄屋敷でも普段、集会所として使用できる広間の畳を、水防用に確保していたと伝えられています。

畳は日常生活にとって大事なもので、水害時には濡ぬらさないように二階や高いところに上げられます。それにもかかわらず、お寺や庄屋さんの大切な畳が水害時に洪水から堤防を守るために使われていたのです。地域の水防活動の拠点としてお寺が活用されていたことや、村人のために庄屋さんが果たしていた献身的な役割を知ることができます。

